

# 国際看護研究会 NEWSLETTER

No.69



2013. 4. 15 発行

本号の内容は以下のとおりです。

- I. 第 72 回運営委員会報告 \_\_\_\_\_ p. 1
- II. 第 68 回国際看護研究会講演会報告 \_\_\_\_\_ p. 2
- III. 国際看護研究会第 6 回タイスタディツアー開催報告 \_\_\_\_\_ p. 3
- IV. 国際看護研究会第 6 回タイスタディツアー感想文 \_\_\_\_\_ p. 5
- V. 第 69 回国際看護研究会講演会のお知らせ \_\_\_\_\_ p. 9
- VI. 皆様へのお願い・お知らせ（事務局より） \_\_\_\_\_ p. 9

※本文に記載されている振込先やメールアドレスについては、現在は使われておりませんのでご注意ください。

## I. 運営委員会報告

国際看護研究会第 72 回運営委員会は 3 月 16 日（土）に開催された。9 月 14 日（土）に予定されている第 16 回学術集会の準備状況、2 月に実施された運営委員選挙結果等についての報告があった。学術集会については準備が遅れ気味のため支援について協議し、4 月のニュースレター発行時には少なくとも会員に広報用ちらしを送付するよう学術集会会長に提案することにした。第 6 回スタディツアーについては、手配を依頼した H 社にあまりにも不手際が多く支障をきたしていることや参加申込者に一部問題が発生したことが報告され、対応について協議した。新運営委員がまだ全員確定していないため、交代までは 2012 年度の委員が引き続き業務を担当することで合意した。2013 年度予算案について検討するとともに会費未納者の取り扱いについて検討し、会費未納が 3 年目まで継続された場合名簿から削除することを再確認した。

## II. 第 68 回国際看護研究会講演会報告

第 68 回の講演会は 2013 年 3 月 16 日 (土) に国際協力機構研究所 (JICA 市ヶ谷研究所) 601-602 号室にて開催されました。講師は鈴木聡子氏 (目白バースハウス) にご講演をいただきました。

### 講演抄録

テーマ「開発の遅れているガーナ北部での巡回型青年海外協力隊活動から体験したこと」

鈴木聡子

2009 年 6 月からの 2 年間、西アフリカのガーナ共和国で生活した日々から早いもので 2 年が過ぎようとしています。ガーナ共和国での経験は、私にとって驚きと発見、そして感動の連続でした。

私が、青年海外協力隊の隊員として派遣された任地は、アッパーウェスト州ナドゥリ郡という所です。ナドゥリ郡は、ガーナ国内の貧困地域と言われる北部に位置し、地域の水が少ないなどの理由から、衛生状態が悪く感染症に罹患する住民が多く、病院までのアクセスも乏しく、さらに妊産婦死亡率及び乳児死亡率が高いなど、保健関連指標の低さと多州との格差が問題となっていました。

私に対するガーナからの要請は、ナドゥリ郡に位置する DHMT (保健事務所) を拠点に管轄エリアを巡回し、地域住民に対する保健サービスデリバリー (乳幼児健診、予防接種、妊婦健診、家族計画、家庭訪問による健康指導、学校保健等) の改善支援というものでした。

私の任地では、内科、外科、小児科、産婦人科等と分けられている日本とは異なり、一つの医療施設が多岐にわたり対応します。そのため、活動当初は現状を知れば知るほど問題点が多く、何から手をつければいいのかと頭を悩ませました。そして、彼らの行動は、環境だけでなく、文化や伝統に基づいており、『自分はいくらにも無知である。』ということ突き付けられ、まずは現地の仲間たちと共に活動し‘知る事’から始めることにしました。

村の診療所で働く医療者たちの多くの役割を占めているものの中に、乳幼児健診がありました。ナドゥリ郡は、十分な交通機関が整っていないため、医療者がそれぞれの村を巡回していました。日本では、1 カ月検診、3 カ月検診、6 カ月検診、9 カ月検診と行われていく乳幼児健診ですが、ガーナの乳幼児健診は、5 歳未満で亡くなる子どもたちが多いため、5 歳まで毎月行われています。

乳幼児健診の際には、体重測定だけでなく、予防接種や母親たちへの保健指導も行われていました。母親たちは、子どもの手帳を持っており、予防接種の記録と体重が記録されます。乳幼児健診をする中で、気付いたことに、母親たちが子どもの体重の増減を理解していないということがありました。村に住む母親たちには、字が読めない人も多く、数字が書いてあるだけの手帳では理解できません。また、『医療者=えらい人』のような雰囲気があり、質問もしません。そこで、同僚とともに体重の増減をグラフとして記入し、体重

測定のために、子どもの体重増減の現状を伝えるようにしました。すると、母親たちは、自ら子どもの体重増減を考えるようになりました。また、季節によって体重の増減があること、離乳食の始まる時期に体重が減少することも知りました。乾季の中でもものすごく暑い時期、気温は40度を越します。その時、ほとんどの子どもたちの体重が減ります。さらに、様々な国の援助により離乳食を6カ月から始めるように言われており、その時期から母乳が極端に減少し体重が増加しない傾向が見られました。医療者でさえも離乳は6カ月から始めるべき、という考えを持っていました。しかし、6カ月を過ぎても順調に体重増加している母親は、ゆっくりと離乳を始めていました。それを知り、同僚に納得してもらったうえで、その母親たちに、離乳の進め方を話してもらいました。

私が、ガーナでできたことはとても小さいことでした。しかしそれでさえ、自分ひとりでできることなどなく、いつも周りにいる人たちに支えられ行うことができました。当たり前のように思われる小さなことが、実はすごいことだったという発見もありました。村人の優しさには、いつも救われていました。水や電気など、物質的には不足しているものが多いかもしれない。しかし、彼らの豊かさを強く感じた2年間でした。

このたび、ガーナでの体験を発表する機会をいただき感謝いたします。また、講演の準備をしてくださった皆様、お忙しい中にもかかわらず来場していただいた皆様ありがとうございました。

### Ⅲ. 国際看護研究会第6回タイスタディツアー開催報告

国際看護研究会では、途上国の実情・保健医療の現状を知り、国際協力として何ができるかを考える手がかりとしていただくために、3年ごとにスタディツアーを開催しています。第6回はタイを目的地として開催しました。日程は次の通りです。飛行機の座席確保の関係で、当初の日程を一部変更して実施しました。

月日	曜日	時間	概要	宿泊
3月 24日	日	10:45 15:45 18:25 19:25	成田発(TG641) バンコク着 バンコク発(TG046) コンケン着	コンケン
25日	月	終日	シリントン県立病院ハンセン病セルフケアクリニック研修・訪問看護	コンケン
26日	火	終日	同上、県立病院見学、地域医療研修	コンケン
27日	水	8:45 9:40 10:40 11:50	コンケン発(TG041) バンコク着 バンコク発(TG714) チェンマイ着	チェンマイ

		14:00 18:00	チェンマイ大学訪問 モンゴル留学生と夕食、その後ナイトバザール 見学	
28日	木	10:00 午後	希望の家（NGO）訪問 市内見学	チェンマイ
29日	金	12:20 13:30 14:50 22:30	チェンマイ発（TG715） バンコク着 バンコク発（TG676） 羽田着	—

今回募集についてはニュースレターでのお知らせを中心に行ったため、気付かなかった会員もあり、当初はあまり反響がなく、期間を1月末までに延長しました。その結果4人の応募があり（実際に1人辞退）、引率者の森を入れて4名という小規模なツアーとなりました。コンケンのハンセン病セルフケアクリニックでは2日間にわたり、活動23年目に入る好善社派遣の阿部看護師に看護の原点を見せていただき、参加者一同大いに感銘を受けました。チェンマイではチェンマイ大学でタイの看護教育について話をうかがい、翌日はかつて研究会でご講演いただいたことのある故大森絹子先生が支援されていた山岳民族の親を失った子どもたちの養護施設である「希望の家」を訪問し、現地NGOと日本からの支援によって運営されている施設の設立経過や現状をうかがうとともに、子どもたちとの交流を行いました。エイズや麻薬中毒などで親を失った子どもたちが助け合って家族のように生活している様子に心を打たれ、子どもたちがやがて自立して行けるようにと考えながら支えるタイと日本の方々の活動に国際協力のあり方を考えさせられました。経費は163,000～169,000円（端数切捨て）でした。参加された3人の方々から感想が寄せられていますので、ご紹介します。（文責：森 淑江）



阿部看護師の訪問看護に同行



「希望の家」の子どもたち

#### IV. 国際看護研究会第6回タイスタディツアー感想文

##### スタディツアー I Nタイ

札幌市立大学看護学部2年 桐澤 ユキ

今回、私は看護国際看護研究会主催の第6回スタディツアーに、初めて参加させていただきました。途上国の保健医療の現状を知り、自分に何ができるかを考えたいという人を募集していたため、すぐに参加を決意しました。私は看護学生を1年間終えたばかりの看護学の初学者ですが、タイでのスタディツアーに参加し自分の知らない世界を観ることで、多くのことを学び、考えさせられました。

まず、コンケンにあるシリントン県立病院およびハンセン病セルフケアクリニックで2日間研修を受けました。そこで、日本からタイへ移住し、ハンセン病による後遺症のフットケアに22年従事する阿部春代看護師に出会いました。ハンセン病の後遺症を持つ人々に対して、特別なことではなく、自分でできることを続けて欲しいとセルフケアを促し、一人ひとりに向き合う姿を目の当たりにしました。ケアをしていけば、目に見えて治癒が進み、ケアを怠ればさらに悪化するという看護の力を改めて実感しました。ハンセン病は治る病であり、後遺症はケア次第であると「知らせる人がいなければ届かない医療」に熱心に取り組む阿部さんが印象深いです。私が住む北海道にはハンセン病患者の療養施設が存在せず、身近な病気ではありませんでした。大学の教科書にも、ハンセン病については1ページにも満たない説明で終わっていました。今回のタイ訪問を契機に、ハンセン病の後遺症を抱えてコロニーに暮らす人々と触れ合い、この病気を詳しく知ったことにより、帰国後は私が見たそのままのことを、一緒に学ぶ学生たちに伝えたいと思いました。病院での研修では特に感染症をはじめ、タイの保険制度やプライマリヘルスケアについて理解が深まりました。医療従事者が不足するタイでは、予防医療・健康増進に力を入れているそうで、高齢化が進む日本と重ねて説明を聞いていました。

また、チェンマイ大学では整った教育や施設を見学させていただき、実習室などには日本で使っている実習道具も多く、日本と異なる場であっても、看護の基本は同じであると感じました。かつてモンゴルから群馬大学に留学し、現在はチェンマイ大学の博士前期課程で学ぶ留学生の方にもお会いでき、学生である私は大変刺激を受けました。

そして最後に、親のエイズ感染や覚醒剤使用などによって暮らして行けなくなった山岳民族の遺児が住む、希望の家を訪問しました。施設創立者の1人であるタッサニーさんは、山岳民族の人々が、エイズ感染や麻薬中毒によって差別を受け、家庭が崩壊し、犠牲となった子供達との苦悩をお話し下さいました。一時的に扱って改善する問題ではないと、子供達の人生を守るために献身してきたタッサニーさんと、希望の家に暮らす子供達との信頼関係に強く心が動かされました。小学生の給食費免除以外はタイ政府からの支援はなく、日本の「希望の家を支える会」による支援金によって施設での生活が成り立っている

ようです。子供達は自然の中で自給自足をし、元気に暮らしているように見えてましたが、辛い過去を乗り越えようと生きていることを知り、私が恵まれている環境で、与えられた物を当然のように受けて生活してきたことを悔しく思います。子供達と言語での意思疎通が思うようにできない中、日本の伝統的遊びである折り紙を共に折り、お互いの文化を教え合えたことが大変嬉しく、今でも鮮明に心に残っています。

今回の旅では、沢山の出会いがありました。自分の知識や経験をもっと世界中に伝えたいと活動する方々ばかりで、私達に沢山のことを熱心に伝えて下さいました。今、私にできることは、まず自分の中に知識を溜め込むことだと痛感しております。旅の中で沢山の事を教えて下さった森先生、シリントン県立病院、セルフケアクリニックやチェンマイ大学で、日本からの訪問者である私達に熱心にお話をして下さいました現地の医療関係者、大学教授の方々に大変感謝致します。貴重な体験をさせて頂き、有難う御座いました。

### スタディツアーに参加して

札幌市立大学看護学部 2年 菊地 彩

3月24日～3月29日の6日間、森先生のご指導の下、タイへのスタディツアーに参加させて頂きました。以前から国際看護に興味があり参加を決め、初めて日本以外で行われている看護を見学、体験、説明して頂いたりということを通してとても多くのことを学びました。今回の学びの中で特に印象的だったことを3つ書きます。

1つ目は県立シリントン病院のハンセン病セルフケアクリニックでの阿部春代さんの看護です。足を洗って保湿をして、足に合うクッション性のある靴を履くということを徹底することで足を切断しないで済み、時間をかけることでみるみる傷が治っていくことを写真を見せながら説明して頂き、看護の力って凄い！と素直に感じました。まだ汚れが残っているのに「足を洗い終わった、きれいになった。」と感じてしまう患者さんに対して、「あなたの足でしょ？」「あなたは顔を洗うでしょ？それと同じように足も洗わなきゃだめよ。」という阿部さんの言葉が印象的でした。患者さんがセルフケアを実践できるように声をかけながらまた私たち学生にも、「どうしてあのような歩き方になっていると思う？」「どうしてここの傷は治りにくいのか？」「どうしてここが固くなっていると思う？」など声をかけて下さり、1つ1つのケアについてや、患者さんの傷のことについてまだまだ知識不足な頭をフル回転させて考えながら見学させていただき本当に勉強になりました。阿部さんからこれから私たちが学ばなければならない「看護」を見せて頂けたと思っています。また阿部さんの看護を見て「継続」することの重要性和難しさも感じました。20年以上もタイという異国で看護を続け大きな成果を上げている阿部さんは本当に偉大な方だと感じました。何事も継続してこそ意味や価値があって、そのとても難しいことを実践しているからこそ、阿部さんはとてもいきいきと自信を持って看護ができているのかと思い、その姿にとても憧れました。私も将来そんな看護師になりたいと強く思います。

2つ目は希望の子供たちとのふれあいです。子供たちとふれあう前に養母のタッサニーさんから山岳民族のことやどのような子供たちが希望の家で暮らしているのか、お話がありました。両親が HIV に感染していたり、麻薬中毒になっていたりと面倒を見るのが難しいという子供たちが希望の家で暮らしていました。子供たちとのふれあいの時間にはみんなで歌を歌ってくれたり、折り紙を熱心にやってくれたり、英語・タイ語・日本語を交えながら積極的に話かけてくれたりととても楽しい時間を過ごしました。その中で感じたことは、素直にこの子供たちの力になりたいということです。今は楽しく遊ぶことくらいしかできませんが、看護師になって様々な経験を積み、知識と技術を身に付けたら、もっと力になれるのではないかと感じました。こんな私でも歓迎してくれたみんなに英語・タイ語・看護をもっと勉強して成長して、いつか絶対また会いたいです。

3つ目は勉強不足です。英語が話せたら出会った多くの人ともっとコミュニケーションが取れたはずだし、1年間大学で学んだことがきちんと定着し、目の前で起こっていることと知識を結びつけることが出来れば理解できることもいっぱいあったと思います。学ぶための環境は十分に整っているのに私は何をしているのだろうかとても情けない気持ちになりました。時間だって作ろうとすれば少なからず作ることはできたはず。例えば解剖生理学などは、ただ勉強するのではなくこの仕組みは何のために学んでいるのか意味を考えながら勉強しないとだめで、与えられたものだけをやる勉強では意味がないことを実感しました。しかし同時に分からない、知らないこと今まで見たことのない世界を知ることは楽しいことでもあると思いました。受動的な学習ではなく、能動的に学習する姿勢でこのモチベーションを維持し続けこれから勉強により一層力を入れていきます。継続！

今回のスタディツアーに参加し、看護師になることも1つも目標ですが、そこで終わりではなくその先の目標も少し見えてきたように感じています。国際的に活動やボランティアをするにあたって、看護の資格と経験があるからこそ、力になれることがあると知りました。看護の勉強をすると決めてよかったと実感した6日間でした。1度にたくさんのことを学び、まだまだ言語化できていないこともたくさんあるように感じていますが、人生の中で最も貴重な体験になったことは確かです。スタディツアーに参加できて本当によかったです。最後になりましたが、阿部さん、シリントン病院の職員の方、チェンマイ大学の先生、留学生のバッサーさん、希望の家のタッサニーさん、通訳の川口さん、希望の家のみんな、タイで出会ったみなさん1つ1つ親切、丁寧にそして熱心にご説明して頂き本当にありがとうございました。そして森先生貴重な体験をさせて頂き本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

## The report of study tour in Thailand -1-

看護師 和田 勝己

**(背景)** 世界はハンセン病対策に長年取り組んできました。近年日本国内におけるハンセ

ン病の発生は著しく減少しています。日本人の新規患者は年に 1-2 名程度です。2012 年タイ国における新規患者数は 198 名であり、2009 年 WHO データーによる新規患者数は、約 25 万人であります。

「カービルの奇跡」以来 60 年以上経ったハンセン病医療の現状を看護師（国際保健関与者）という視点から日本の実情とタイ国の実情を把握理解するよう試みました。

**（活動）** 渡航前に日本でスタディツアーへ向けての事前学習で、大阪府主催の“ハンセン病問題を理解するために”講演会に参加し、疾患に対する理解を深め、またハンセン病実態調査報告書を読み返し、日本国憲法第 13 条（個人の尊重）にもとづく人格権の制限などに関心を寄せ学習しました。

2013 年 3 月 25 日～26 日終日シリントン県立病院訪問し、①ハンセン病セルフケアクリニックでの研修および実際、②訪問看護の実際、③県立病院地域医療に関しての医師の説明、④偶然遭遇した災害医療（交通事故）の現場対応見学、⑤診療の手順・診療の実態及び統計・国民サービス 5 年計画等の説明、⑥感染症外来看護師の具体的感染対策の説明を受け、またハンセン病療養の現場に密着し、セルフケアの実習を体験できました。

**（成果）**各部署での感染対策は機械器具こそ少ないのですが、環境は十分整っていました。スタッフたちが感染予防行動を十分把握し、患者指導にエネルギーを注いでいることが、伺い知れました。感染予防行動の一つ、予防意識の向上の点で患者には医療者の意識が徹底して伝わっていない点に、もどかしさを感じました。ハンセン病に対しては各国からの支援が少なく、支援の物品やケア、考え方が文化の違いも影響し十分生かされていないようにも感じました。援助する側は、タイ国の現状・文化・習慣・民族的特性を理解することはもちろん、疾患からくる気配り・リハビリ・セルフケアに対する洞察も必要となってきます。

多くの国において、社会的発展が弱者を社会の片隅に追いやり、彼らの人格まで抹殺しようとする社会的背景を見過ごすわけにはいきません。我々は、医療人としての最低限の倫理観を養い、人を気遣う意識が薄れてしまう社会には敢然と立ち向かう勇気を持ち、彼ら自身がエンパワーメント出来るよう後押しできるように環境作りをしてあげたいものです。またその勇気を今回の研修は与えてくれました。

世界の多くの方々にハンセン病の実態を語り続けたく思います。

**（結論）**ハンセン病回復者に寄り添い後遺症に取り組みケアし続ける阿部看護師の看護実践を拝見させていただき、実際の看護現場において、どのような援助が必要かを学ぶことができ国際保健の難しさや面白さに気付くことができました。ここにハンセン病看護があり、これを他国の多くの理解者に、またハンセン病を知らない人々に多くを語り、多くを知っていただくことも今回の研修参加者の務めとっております。タイ国での医療現場の現実を多くの人々と共有することで、研修目的は達成されるものと思います。また、世界にはいまだ多くの新規患者が発生していますが、早期発見・早期治療の一翼を担い、国際医療保健に貢献したく思います。（次号に続く）

## V. 第 69 回国際看護研究会講演会のお知らせ

日時：平成 25 年 6 月 15 日（土）13:00~15:00

会場：国際協力機構研究所(市ヶ谷 JICA 研究所) 203 号室  
東京都新宿区市谷本村町 10-5

講師：田中ゆり 様 政策研究大学院大学 保健管理センター 保健師

テーマ： 留学生への健康支援 -93ヶ国からの留学生を受け入れて-



発表内容要約：

政策研究大学院大学（GRIPS：National Graduate Institute For Policy Studies）は 94 番目に設立された国立大学で、現役の官僚や銀行、企業に勤務する社会人が在籍し、学生の 70%は東南アジア、アフリカ、旧ソビエト連邦など 93 カ国からの留学生です。彼らは 1 年ないし数年在籍して修士及び博士課程の学位を取得し帰国、将来国を背負っていく立場になります。来日後、保健管理センターへの相談内容は、寄生虫や結核などその国の衛生状態に起因する疾病、急激な国の発展で生じた生活習慣病、また同行した妻や子供達、学生自身のメンタル相談など多岐に渡っています。留学生達に多い疾患や、来日後どのような環境で過ごしているかなどについて、センターから見える日常をお話できたらと思います。  
参加費： 本会会員 無料 ・ 非会員 500 円 \*会場で入会手続きが可能です  
事前申し込みは不要です。お気軽にお越しください

## VI. 皆様へのお願い・お知らせ（事務局より）

いつも本研究会の運営にご協力いただき、ありがとうございます。

1. 2011、2012 年度の会費をまだ納めていない方は、お振込をお願い致します。  
研究会は会員の皆様からお振込頂く年会費（2 千円）により運営されています。納入年度は封筒の宛名の右下に会員番号とともに記載されています。また、事務整理の都合上、振込用紙に会員番号もご記入をお願いします。振込先は一番下に記載してあります。
2. 国内外に転居された方もいらっしゃるかと思います。国際看護研究会では経費節減のため、NEWSLETTER の送付にはメール便を利用しておりますが、最近転居先不明で戻ってく

る場合が多くなっています。海外にも NEWSLETTER をお送りしています。

**転居された方は研究会事務局(下記 e-mail あて)に新住所をご連絡下さい。**

3. NEWSLETTER の「海外情報」に掲載する記事を募集しております。会員の皆様の活動報告、活動国の様子、医療事情、あるいは旅行記など海外に関する情報をお待ちしております。研究会事務局(下記 e-mail あて)にお申し出ください。
4. 会員の皆様からのご意見を反映して研究会の活動の更なる改善を図りたいと思います。講演会のテーマ、NEWSLETTER についてなど、本研究会へのご意見をお聞かせ下さい(下記 e-mail あて)。
5. 第 14 回学術集会抄録の残部があります。ご希望の方はその旨明記の上、抄録代として 500 円、郵送代として 80 円の合計 580 円分の切手(80 円までの小額切手をお願いします)と返送先を書いた A4 サイズ用の返信用封筒を事務局までお送りください。

---

※個人名で書かれた原稿内容は研究会の意見を反映するものではありません。また、ニュースレターの記事に関して無断転載を禁じます。皆様のご理解をお願いいたします

※今回はスタディツアーの報告を掲載するために発行が遅れてしまいました。ニュースレターをお待ちいただいている皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

# JSIN Newsletter